

<実践報告>

英語で自分の考えを伝え合うことを通して  
互いにわかり合うよろこびを感じる英語の学習

小林 真 松本市立開成中学校

Learning English through Exchanging Thoughts and the Enjoyment  
of Understanding Others

KOBAYASHI Makoto: Kaisei Junior High School, Matsumoto City

研究の目的	英語で自分の考えを伝え合うことを通して互いにわかり合うよろこびを感じる英語の学習を明らかにすること
キーワード	英語の学習 学び 伝え合う Task
実践の目的	生徒が夢中になって学習課題を追究する英語学習
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部附属松本中学校 2年生 (36名)
実践期間	2007年4月～2008年3月
実践研究の方法と経過	<p>2007年4月より酒井英樹准教授の指導を受けながら研究と実践を開始。</p> <p>2007年10月 信州大学教育学部附属松本中学校2年生の英語の授業で研究授業を実施。公開後、研究会、指導を受ける。</p> <p>2007年12月 信州大学教育学部附属松本中学校2年生の英語の授業で2回目研究授業を実施。公開後、研究会、指導を受ける。</p> <p>2008年1月～3月 2回の研究授業を中心に研究のまとめ</p> <p>2008年3月 研究報告書をまとめ、報告会にて発表する。</p>
実践から得られた知見・提言	<p>生徒の体験や心情から問いが立ちあがり、課題把握が必要感を伴って行われたとき、生徒は課題の追究に夢中になる。学習課題が生徒にとってどのような学びとなるのか常に検討することで、支援がより具体的になり、生徒の個の学びから生徒による学び合いにまでつながる。また、英語の実践的な運用力を獲得していく学習においては、特にねらいを明確にしておくことが極めて重要である。</p>

## 1. 実践の概要

### 1.1 研究テーマ

「英語で自分の考えを伝え合うことを通して互いにわかり合うよるこびを感じる英語の学習」

### 1.2 研究テーマ設定の理由

より実践的な英語のコミュニケーション能力の育成を図ることが求められて久しい。Task を用いた指導やアクションリサーチによる指導などがその具体である。Task を用いた指導では、従来のコミュニケーション活動に比べ、より現実的な場面に即した実践的な言語活動が行われ、学習した知識を総動員して学んでいくところに特色がある。この指導はTaskを解決するために英語を用いていくので、学習者主体の学習や活動が行われ、Taskの解決を図ろうと活動に集中して取り組むことで、英語を使うことに面白さを感じ、Taskの解決と相俟って英語学習への関心意欲も増すことになる。また、友だちとの関わり合いが深まるようになると、友だちとの学び合いも深まり、自分の考えを練ることで新たな表現方法や見方、考え方を身につけらようにもなる。

習熟度別や少人数による学級編成のなかでいくつかTaskを用いた指導を実践してきた。生徒は楽しそうにまた、意欲的に学習に取り組みTaskの解決を行うが、確かな学びになっているのかに不安もあった。特に目標を明確にして、その目標を達成するために効果的なTaskを設定することや確かな力となったのか適切に評価することが難しい。

そこで、Taskを用いた指導をより生徒の側に視点をおいて追究することにした。Taskを用いた指導では、その解決をめざして追究する過程で自分の考えを表現したり、友だちに伝えたりすることで、Taskの解決や達成感とともに見方や考え方に新しい視点が得られたり、考えが深まったりすることがある。この学習ではいくつか留意しなければならないことがある。友だちと追究する前に個の学びが確立していることやより実践的な状況を設定し生徒の知識や体験を総動員した学びを大切にすることなどである。特に、生徒がTaskの解決に夢中になって追究するために、生徒にとって真に追究したい必要感に合致した課題把握が大切である。個の学びが確立していることで、友だちと共同でTaskを追究しようとする思いや友だちの考えを聞いてみたくなる思い、友だちに伝えたくなる思いなどが強くなる。そして、互いの考えを伝え合い、Taskを解決したときに、「なるほどそう考えるといいのか」「そんな英語表現もいいな」など友だちの考えや表現、追究の良さに学び合い、ともに考えていたことや思いをわかりあえることでよるこびを感じるようになるだろうと考えた。

### 1.3 指導者による指摘事項

#### (1) 指導者

- 酒井英樹先生 (信州大学教育学部准教授)  
小林雅彦先生 (信州大学教育学部附属松本中学校副校長)  
平田孝司先生 (信州大学教育学部附属松本中学校教頭先生)

## (2)実践の概要

### ①実践1 単元「ホームステイの疑問を解決」

「ホームステイの疑問を解決」の実践では、生徒たちはまず、教科書にある奈々たちの悩みを読んで、自分が助言する立場ならどう助言するかを具体的に考える学習をした。次いで本校ALTが実際に日本で体験した場面の英文を読み、生徒たちは同様の場面でどのように言うのかを考えた。教師は個の学びが確立し問いが生じ、課題追究できるようにT-Fの位置づけとその場面での具体的な一言を理由とともに考え、英語で表現することを大切にされた。授業ではT-Fの位置づけが不明確で、生徒の多くが問いをもち課題追究に主体的に取り組むのに時間がかかってしまった。

### ②実践2 単元「とっておきのクリスマス」

より生徒の声を大切にされた授業を志向した「とっておきのクリスマス」の実践では、調査活動を取り入れた。生徒たちがSilent Night物語を、その文化的社会的背景も理解して読み味わうために、まずクリスマスや物語についてインターネットで調べた。次に、調査したことを友だちに分かりやすく伝えるため、既習表現を用いた英文で強調など表現方法にも留意して伝えた。互いの思いを理解しあった。授業では、A生がサンタクロースは幸福の使者なので、幸福を願っているのだからthinking happinessを強調して伝えたところ、友だちからわかりやすかったと伝えてもらい、充実感をもつことができた。

## (3)実践1についての指摘事項

①Taskのゴールを明確にしたい。例えば、本時では、ALTの先生の言葉を見せて、「この場面で適切だったのか、理由を英語で書いてみよう」でもよかった。

②生徒はALTの先生のことを知ろうとしていた。T-F問題は生徒の意識から生じる問題にしたい。例えば、「みんなALTの先生について知っていること何」と問い、リストアップする。そこから、生徒が「おや」と思うことを考えてみる。

③Out putがあると生徒の学びの動機が強まる。そこでModelの提示ができるとよい。out putとin putが相互に行われると学びの動機が強まる。

④生徒の考えをより大事に聞いて、授業を構成する。例えば、T-Fで、「みんなは朝食に何を食べる。そうだよね。みんなが朝食にシリアルなどがでたらどう思う。」など、生徒の知っているところから授業をつなげたい。また、Thank you.と書いて表情を変えろという班もあったが、そこで「なぜそう考えたの」と問い返してやることで、「相手にとげのない言い方をしたかったから」などの答えを引き出したい。(以上 酒井先生からの指摘)

⑤評価をどう位置づけるか。本時は「伝える」となっているがそれは書くことか話すことか。単元の目標の中につける力をより明確に鋭角的にする。「自分のこととして」という記述が多すぎる。そこを明確にすることでつける力もはっきりとする。(副校長先生の指摘)

## (4)実践2についての指摘事項

①伝えたい思いと分かったという思いは必ずしも一致しなくてもいい。

②授業の終末で、新しい情報を知ったぞという思いが生徒のなかにあることが大事。

- ③Task を用いた授業という点では本時の授業展開はよい。本物の話は聞く方も真剣になる。
- ④調べて自分でまとめ発表して相手に伝えるという支援は適切であった。
- ⑤今後の課題として自分たちで発表をプレゼンすることや、イラストやジェスチャーなども活用することがあげられる。
- ⑥生徒が情報を持っていて、生徒が伝えているのだから、生徒に返すようにしたい。例えば、発表で Festival という言葉が出てきたが、教師は Did you talk about festival? Who talk? などと問い返したかった。(以上 酒井先生からの指摘)
- ⑦全体発表の前に行ったモデルのグループにもっと支援を入れておきたい。声の大きさ、スピード、明瞭さなど徹底したかった。
- ⑧伝える中身が大切。何をどうやって伝えるのかをさらに検討したい。
- ⑨今回最初の三つの班は声量が弱かった。そこを克服させたい。練習してもう一回挑戦して克服し、高まったところを評価したい。
- ⑩授業の終末で「今日、知ったことは何かな」と自分で振り返り、成果を確認できるとよい。
- ⑪ロングスパンで考えて、課題をどうステップアップしていくか自ら考えられるように。
- (以上 副校長先生からの指摘)
- ⑫伝え合うことの基本は声の大きさ。そこを日常から指導したい。
- ⑬自分の発表をしっかりとやりたいという意識と相手にわかるように伝えようとすることに意識の差があった。伝えようとする必要感が薄いのは生活に密接した内容ではないこともある。また、自分の調べたことと友だちが調べたことの接点がないと、盛り上がり欠ける。
- ⑭伝え合うという視点で3年間を見直し指導を検討したい。中学3年生で適正な声量でメッセージ性の豊かな内容を伝えるために、各段階でどうすればいいのか、文法や発表方法、総合力などとともに検討したい。(以上 教頭先生からの指摘)

## 2. 実践の具体(その1) 単元「ホームステイの疑問を解決」

### 2.1 単元設定の理由

A 君は自分の夢を I want to be a zoo logist. I research a small monkey. とまとめ、友だちとの対話を不安そうに始めたが、友だちが zoo logist という表現を理解し、Why? や What's a zoo logist? と対話が続くことで、自分の考えが相手に通じことに喜び、自分の表現に自信を深めることができた。このように A 君は英語学習において友だちとの関わりに楽しみを感じている。

そこで、単元の導入で生徒たちがホームステイのガイドブックを読み、コミュニケーションのあり方を問う T-F 問題を通し、コミュニケーションが大切であることの具体的な内容を考えられるようにする。次にホストマザーと慎のベッドメイクについての対話を、自分の立場を選ぶ T-F 問題を通して考えることで、アメリカの家庭でのホームステイを慎がどのように過ごしたかを自分のこととして考えられるようにしていく。

そして、ALT の先生が疑問を感じる場面の英文を生徒たちが読み、状況や心情を理解し、「この場面で自分が ALT の先生ならどんなことを言うのか」と発問し、理由とともに友だち同士で伝え合うことで、互いの考えを分かり合い具体的な一言の英語表現を味わえるようにする。

このような指導を経て、A 君が友だちの考えた一言や理由を聞いて、英語の表現はいろいろあるけれど、考えた理由を友だちと分かり合い、異文化で生活して困ったことがあったら相手の気持ちを考えながら、自分の考えを伝えようとするのが大事だということを実感として学ぶことができるようになってほしいと考えて単元を設定した。

## 2.2 研究テーマに関わって

学習を深めるなかで生徒にとって問いが生まれ、それが学習課題となり、追究が始まることを大切にしたいと考えてきた。そこで、可能なかぎり現実に則した学習課題が生徒の問いから生じ、その学習課題を生徒が既習の知識を総動員しながら追究し、解決していくことで自分の考えや気持ちを英語で伝える力を高めたい。そうすれば、伝えたい思いをもってコミュニケーションをして、互いに分かり合えたときの喜びが、楽しさにつながると考えた。

本単元で生徒は、単元での学びを深めていくことで、コミュニケーションの大切さとは、相手を理解したいという気持ちと伝えたいことをもって、相手のことを考えながら、自分の意思をはっきりと伝えることであると気づいていくだろう。

教師の支援では二点に重点を置いた。一つは T-F 問題である。T-F 問題に、学習課題の追究で参考となる内容や記述を入れることで、その人の状況や心情などについて考え、自分ならどうするか考えるきっかけとなるものとした。

もう一つは友だちとの追究で深まる授業形態である。学習課題の解決にむけて追究していくとき、個人で考えた内容を班員と検討し合うようにすることで、新たな視点を得たり、自分の考えや表現方法に自信を得たり、自分の考えや表現のミスに気づき修正したり、やる気を得て課題の追究に向かったりすることが可能であると考えた。

## 2.3 学びの姿

### (1) ALT の先生の状況に自分を重ねて考える A 君

個人追究	教師 22A	ケリー先生の状況はわかった。なんて書こうとしているの。
	A1	うん。わかったんだけど、なんて書けばいいのか・・・むずかしい
	教師 22B	どこか似たケースがなかったかな。
	A2	奈々のケース。
	教師 22C	そうだね。それをヒントに考えて書いてみたら
	A3	なるほど。(書き始める)
	教師 22D	どう書けた。
	A4	消しちゃった。
	教師 22E	えっ。どうして。
	A5	自信がない、ほんとに言いたいこととじゃないような気がして。
教師 22F	それならいい。その気持ちを大切に。	

この場面で、A 君は ALT の先生の状況を考え、自分の言葉で書きたいと思うようになった。ALT の先生の状況にもし自分がいたらと考えて、Thank you, I enjoy. と書き換えた。A 君は理解したことに自分をあてはめどうするか考え、言うことを明確にして、知識を総動員し英文にした。A 君は学習課題を追究する前に、何を考えればいいのかを明確にしようと、自分の考えを練ることによって、自分の考えはつきりさせて学習課題の追究ができるようになった。

## (2) 班で友だちと追究する A 君

全 体 追 究	教師 23	OK. Please stop. Now is the time to think with your friends. Please stop. OK
	教師 23A	stop Please.班の中でね, 理由をやっぱり英語で書いてみてください.
	A6	(机間指導) (ざわつく) 自分の意見伝えている. ・・・(照れ笑いする)

## (3) 英文分析

班	Thank you .It's very good.	I'm sorry, but I can't eat them for morning.
生徒	個人の考え	その英文の理由
A 君	Thank you I enjoy. □	□ □
C 君	OK Let's enjoy. Sorry. I can't eat them for morning	You must sometimes eat them.
D 君	I'll eat them for lunch. I'll eat them for lunch. I can't eat lunch.	He must eat them. They made them so hard.
E さん	Thank you I eat them. Thank you , but I don't like rice and miso soup for breakfast.	Because his wife made them so hard. Because his wife made them so hard
G さん	Thank you I enjoy. It's very good. But I don't like Rice and Miso soup for breakfast. I'm sorry.	Kelly's friend and Friend's wife are very good people.

ALT の先生の立場になって具体的な一言を班の友だちと考えた。A 君は Thank you I enjoy と考えていたが、友だちと相談することで Thank you .It's very good. が班の意見となった。A 君は自分の考えがみんなと同じことや、考えを伝えて同意されたことにうれしさを感じた。A 君が自分の考えを伝えようとし、友だちも受け入れていったことがうかがえる。それは A 君が Communication is important. を実際に体験している時間でもある。

理由を表す英文を考えるときは、個人追究のときに、はじめ A 君は十分な英文を書けなかった。この状況で何を言ったらいいのかわからなかった。しかし、「友人や奥さんがいい人だ」という G さんの意見や「一生懸命作ったから」という D 君の意見などが出て、E さんの I'm sorry, but I can't eat them for morning という意見にまとまった。自分の考えを明らかにして英文にまとめることができなかった A 君は友だちと話し合うことで、新たな考えを知り、「友人や奥さんが一生懸命つくったから」気持ちを傷つけないように、I'm sorry, but I can't eat them for morning がいいと考えられるようになった。友だちの考えを聞いたり、自分の疑問を投げかけたりすることで、どう表現したらいいかわからなかったことが明らかになり、その内容を英語で書くことができるようになった。友だちと学び合うことの成果である。

#### (4) A君の振り返り

ALT先生の日本での悩みをみんなで考えていろいろな意見があって面白かったし、他の国から来た人は靴や食べ物の悩みがいろいろあって、でも気持ちを言うときはほめてから自分の意見を言って、相手を悲しませないようにしているな—と思いました。

彼にとって本時の学びは「自分の気持ちを言うときは、相手の気持ちに配慮して、相手をほめてから、自分の考えを言うということが大切だと分かった」というところにあった。本時の学習を通して、実際に英語で自分の表現や考えた理由を班員に伝えようとすることで、実感として感じたことでもあろう。

#### 2.4 成果と課題

##### (1) 学習課題について

本時の学習課題が設定されたのは T-F 問題が終わったときだった。ALTの先生の言葉を見せて、「この場面で適切だったのか、そう考える理由を英語で書いてみよう」がよかった。意味を重視して、友だちとともに考えることで自分の考えを表現できるようにしたい。

##### (2) 生徒の考えを大事にした支援

生徒の知っていることから話を広げ、問いを立ち上げ、学習課題へつなげたい。つまり、生徒の視線から授業を構成することをより留意し、学習課題の設定や課題把握、課題追究に生徒が乗り込んでいくことを大切にしたい。そのために、生徒が考えたいことは何かを常々意識する。生徒の実態と学習課題の関連をより深く考えて、授業を構成したい。具体的な手だてとして、単元の中に調査活動を取り入れ、調べたことを発表することをきっかけとしたい。

### 3 実践の具体 (その2) 単元「とっておきのクリスマス」

#### 3.1 研究テーマに関わって

##### (1) A君の姿から学んだ「学びの場づくり」の構想

A君は題材に出会い問いをもつ場で、考えを表出することや身近で具体的なことを考えることで、考えることが明らかになり興味や意欲も高まって追究したいことが明確になってく。そこで、友だちと追究する前に自分の考えを練っておくと、伝えようとする意欲が高まる。そうなったときに、自分で調べたり、興味が同じ友だちと調べたことをまとめたりすることで、他者の思いを確認したくなるように支援する。

そして、A君は友だちとのかかわりから学んだことを振り返り、新しく知ったことを見つめ直し、自分の考えを書いていくときに、振り返ることを明確にすることで、学びを深められるようにしたい。

##### (2) 調査活動の教材化

(生徒が調べたいとリストアップしたこと)

- ①クリスマスプレゼントの意義やサンタクロースの願いは何か
- ②オーストリアのクリスマスの様子と日本を比較する。
- ③オーストリアの国やオーペンドルフの街、人々の様子について
- ④Silent Nightの曲、歌詞の意味について
- ⑤讃美歌、クリスマスキャロルについて

<p>⑥クリスマスの食事やアイテムとクリスマスに寄せる人々の思い・クリスマスの目的          (調べ方)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級全体で追究し伝え合うことを確認し、調べることを6点あげて、調べたい項目の希望をとり、上限の人数を8名として班を編制し、インターネットで検索して調べる。</li> </ul> <p>(予想される英文)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ There is a Santa Claus in Finland. He will travel all over the world to send Christmas presents. He wants many children to be happy . ・ People in Austria spend going to church at Christmas to pray.</li> <li>・友だちにわかるように伝えるためにはどうすればいいのか問いかけ、できた英文も班員に聞いてもらい、伝えたいことが伝わったか確認し、既習表現を用いた英文にしていく。</li> </ul> <p>(発表の仕方)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・声の大きさや速さ、間、抑揚、強調など表現方法を工夫することで伝えたいことが友だちに伝わるようにする。また発表後、聞いていた友だちの感想を発表者に返すことで、伝え合いわかりあえた実感がもてるようにする。</li> </ul> <p>(予想される生徒の意識の流れ)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①自分の思いや考えを伝えることは楽しい。でももっとうまく伝えることができないか。</li> <li>②自分の思いなどを互いに伝え合うことをもっと体験したいな。</li> <li>③物語の背景のクリスマスやオーベンドルフのこと、キリスト教について調べてみよう。</li> <li>④調べたことを友だちに伝え物語の背景を理解するために友だちが知りたいことは何かな。</li> <li>⑤新しい事実や考え方を伝えるような情報はないかな。</li> <li>⑥聞いていてわかりやすい分量はどのくらいだろう。班のメンバーに確認してもらおう。</li> <li>⑦友だちが聞いていてわかりやすい英文ってなんだろう。難しい単語を使ったり知らない構文で作ったりした英文ではわからない。今までに学習した構文や単語を使えばいい。</li> <li>⑧話し方はどうすればいいだろう。伝えたい内容を表すキーワードを強調したり、その前に</li> </ol> <p>間を作ったりしたらどうか。大きな声で正確に発音することも大事だ。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>⑨友だちに話した内容が分かりやすかったと言われて、自分が伝えたかったことが伝わったと実感できた。聞いている人の立場になって考えて、学習した表現を使った英文や強調する表現を使うことで、こちら側が伝えたいことが伝わるんだ。</li> <li>⑩やっぱり学習した構文や単語、日本語を使うなど聞いている人の立場になって考えないといけなかったな。朗読のときにはそこに気をつけてもう一度やってみる。</li> </ol>
--

3.2 学びの姿

(1) 自分のメッセージを伝えようとする A 君

9:02	教師 37 I2	A 君の言葉で伝わってきたメッセージってなんですか。I 君、どう。幸せの使者というところが他の英文と混ざっていてわかりやすかった。
	教師 38 A2	幸福の使者って伝わったって。いかががですか、感想は。よかったです。
	教師 39	伝えたかったんですよ。そこを強調したい、そこを強く読もうって何回も練習したんだよ。

この場面で A 君は **Thinking happiness is** も幸福の使者も強調して話せたが、覚えたという自信が十分でなかったため、メモを手にしてチラチラ目になっている。I2 の発言の「幸せの使者というところが他の英文と混ざっていてわかりやすかったです」は、A 君にとって伝えるために、強調して話すように努めてきたことが成果として報われた一瞬であろう。A2 の「よかったです」



には実感がこもっていた。A君は、友だちに自分の伝えたかった「サンタクロースは人々の幸福を願っている」という内容を *Thinking happiness is* や幸福の使者を強調して伝えるようとし、実際にその内容が友だちに聞き取られ、「わかりやすかった」という思いを伝えてもらい、英語で互いに伝え合うよろこびを実感することができたのである。

### (2) A君の本時の振り返り

A君	各ジャンルごとの発表を聞いて、きよしこの夜に関連していろいろなことがわかってよかったし、自分が伝えたかったことが伝わってよかったです。
----	---

A君の「自分が伝えたかったこと」の具体は *Thinking happiness is important for Santa. They call Santa “幸福の使者”* である。彼は、この文の内容を友だちに伝えるために、全文を声量豊かに話すことと強調して表現することを大切に考えた。伝えたいことは何かを考えぬいて、*Thinking happiness* と“幸福の使者”を強調して話そうとした。A君はサンタクロースはなぜプレゼントを贈るのかが謎でインターネットで調べ、人々の幸福を願っていることをつきとめた。発表終了後に友だちからA君の発表がわかりやすく「幸福の使者」というところが *Thinking happiness* などほかの表現とともにわかりやすかったと言われ、「うれしかった」と答えている。それは自分の今までの取り組みや意図して練習したこと、友だちへの思いなどを理解してもらったと感じたからであろう。伝わったことがわかりうれしさを感じているのである。

### (3) A君の班の英文分析・クリスマスプレゼントとサンタクロースについて

生徒	英語表現	表現の工夫
C君	<i>Santa comes from St.Niconus. Because he gave a lot of children presents. There is a story, legend of Santa.</i>	強調 (St.Niconus)
B君	<i>Someday Santa threw gold coin into the poor family. Then the coin is into the sacks.</i>	強調 (gold coin)
H君	<i>The family became happy. Because they have money.</i>	強調 (happy.)
A君	<i>Thinking happiness is important for Santa. They call Santa “幸福の使者”.</i>	強調 ( <i>Thinking happine</i> / “幸福の使者”.)
D君	<i>Some Christian sent poor people presents in 明治時代 in Japan. Almost all Japanese sent presents in 大正時代.</i>	強調 (明治時代, 大正時代)
C君	<i>Santa has eight tonaikais. These names are “Tashya”, “Fransa”, “Dolra”,...“Qupi”, “Commnet”.</i>	強調 (These names)

教師は「自分が聞く立場だったらこの英文はわかりやすいかな」と繰り返し尋ねた。A君は教師の助言を聞いてすぐに、既習表現を用いた英文を書き始めた。最初の英文の *Thinking happiness is* はこの単元で学習した表現である。「サンタクロースは平和の使者なんだ」ということをどう伝えるかも、学習した Call+A+B の表現を思い出して英文にまとめている。この傾向はC君やB君にも見られる。A君は話し方も考えて、伝えたい内容をあらかず言葉を強調して話すことを大切に考え何度も練習した。

### 3.3 成果と課題

#### (1) 学習課題について

考えを伝え合うとはどういうことかさらに究明したい。発表が終わり「どんなメッセージが伝わったのかな」と教師が発問したとき、学習内容について新しい情報を得たという思いがより確かになるようにしたい。

#### (2) より生徒の考えを大事にした支援

学習課題が生活に根付いている、生徒の生活や考えの中に入ってきているかが大切。そのために、自分の調べたことと友だちが調べたことの接点をもてるようにしたい。

#### (3) 考え方や見方を学び合う授業を志向する

本時では自分の発表した内容が伝わったかを友だちの言葉から味わい、わかり合える実感を大切にしたが、生徒からすると伝わった結果に重きをおくようになってしまった。学習している生徒がともに学び合うことで見方や考え方を深められるような授業にしたい。

### 4. 二つの実践からの成果

単元終了後の生徒の振り返りでは、「よかった」といった言葉も見られた。これらの生徒たちに共通していたことは学習課題がその生徒たちに興味のあるものになっていたこと、友だちとともに追究することで自分の表現や考えに自信を深めたり、新たな見方を知ることができたりしたことがあげられる。自分の考えを伝えることで意図したことが相手に伝わったこと、友だちの考えを知って「わかった」という実感をもてたことが大きい。

よろこびを実感できなかった生徒はどうか。学習課題が生徒にとって真に追究したくなるものであるかが大切となる。生徒の体験や心情から問いが立ちあがり、課題把握が必要感を伴って行われたとき、生徒は課題の追究に夢中になる。

生徒が自分の知識や体験などを総動員しながら英語の実践的な運用力を獲得していく学習においては、ねらいを明確にしておくことが極めて重要である。つける力を精選し、その上で生徒の自主性を尊重した学びを構成するようにすることが大切である。「この授業でこんな英語の力をつけたい」というねらいを常に明確にする。

支援を具体的なものにしていくために素材の本質的な価値の把握と教材化を、生徒の視点を大切にしながら行いたい。「こんなこと学習したら生徒はどんなことを思うかな」ということを思いながら日々の授業を構想し実践する。

(2008年6月30日 受付)